

④通信制高校生と学習

持田紀夫

——通信制とは
二十生徒それぞれの学ぶ姿

一——通信制とは

通信制とはどういうシステムをとっているのか、なかなか知られていない。かく言う私自身も、通信制に転勤して来るまでは、その教育がどのような形で行われているのかさっぱりわからなかった。神奈川県の高校教員として十五年近くを、全日制や定時制の高校で生徒の指導に過ごしてきた私でさえそうなのだから、一般の方には見当もつかないのではないだろうか。そこで、まず簡単に内容を紹介させていただこうと思う。

①—授業（スクーリング）

通信制では「授業」のことを「スクーリング」と呼んでいる。このスクーリングの日数は一年に二十日前後であり、隔週の日曜日と、日曜日に登校できない人のために、同じ内容で火曜日に行っている。このスクーリングの説明を聞き、

教材を理解し、自宅へ帰ってレポートの設問をやると良い。もちろん予習をして来て質問する生徒もいる。

②—教材と学習方法

教科書・学習書（トラカンのようなもの）とレポートを年度初めに渡している。学習書やスクーリングの講義を元にして、まず教科書の内容をよく理解してもらうことが大切である。次にレポートの問題をよく考えて答えを書いていく。

レポートというのは、簡単に言えば問題集（学習課題集）である。このレポートを中心とした学習が、通信制教育の特徴であり、他の課程と異なる点である。だいたい五頁前後が一回分になっているので、それだけできたら学校の方へ送る（一年間で一教科につき十回ぐらい）。

③—テスト

レポートがある程度のところまで進むと、テストを受けることになる。三、四通レポートを提出すると、その教科の一回目のテストを受験できると考えて良い。そういうことを三回くり返す頃には一年間が過ぎており、その科目が終了したことになる。

不幸にして、レポートの提出がいろいろな事情で遅れていくと、このテストを受ける機会が先に延びてしまう。

その結果、一年間で三回目のテストまでいかななくてもかまわない。残りを引き続き継続して学習して良い。従って、二年生になって一年生の科目を学習している者もいる。もちろん一年間で学習が終わるにこしたことはないが、一応、二年間でその科目を終了すれば良いと考えている。

テストは学校へ来て受けてもらっている。

④—費用

授業料のようなものは、年間七千円前後で済む。他の納入金を考えても一万円を考慮しておけば良い。通信制の生徒にとって非常に幸いなことは、教科書や学習書が国庫費用で購入され、生徒に無償(タダ)で配られることである。

またレポート等の郵送料は、通常の二割、つまり十二円ででき、一般郵便物に比べて驚くほどの料金で、レポートのやりとりをしている。また通学のための電車の回数券が半額で購入できるようなっている。二週間に一度の登校のため、こういう方法で学生割引の形にしているわけである。

⑤ 行事

全日制の学校に比べて、登校日数が少ないので、学校行事にあまり時間をかけるわけにいかないのも本音であるが、少ない時間の中でかなりのものをやっている。

「校外研修」と呼ぶ遠足のようなものがある。昨年は子供の国でバーベキューをやった。

「新入生歓迎会」として球技大会をクラス対抗で行っている。昨年はインディアカをやった。「文化祭」「体育祭」を一年おきにやっている。これは準備にちよっと手がかかる。なかなか大変な行事である。

「卒業生への送別会」もやっている。歌あり、

クイズあり、寸劇ありで、楽しいうちに卒業生との別れをおしんでいる。

この外に、クラスやクラブでのいろいろな活動があり、夏休みの合宿やキャンプなども行われている。皆、それぞれに工夫をして青春を謳歌していると考えていただければ幸いである。

「修学旅行」もある。

もちろん「入学式」や「卒業式」も行っている。

⑥ 進級・卒業

一年間に六、七科目を終了すると無事に進級できる。通信制では、科目数という数え方ではなく、実は単位という数え方を用いている。レポートを一年間に六通提出する科目は二単位の科目になる。十二通提出する科目は四単位の科目である。

そして、一年間に六、七科目を終了すると、二十一〜二十四単位を修得したことになる。毎年この調子で修得していくと、順調に進級できる。四年間で八十単位以上を修得すれば、無事に卒業ということになる。

四年間で七十単位しか修得できなかった場合は、もう十単位を翌年学習するようになる。五年かけて卒業する生徒もかなりいる。

四年という年月はかなり長い年月である。私

は新入生に、二年間で四十単位を得ることを目標にしなさいとよく話す。二年間なら頑張ろうという気持ちを継続しやすいからである。

通信制の場合は、入るのが安く、出るのが難しいと言われている。実際に、卒業できるのは入学者の三割ぐらいである。しかし二年間頑張った人は九割近くが卒業している。だからこそ、とりあえず三年生になることを目標にして学習するように指導しているわけである。

⑦ 多種にわたる年齢層の生徒

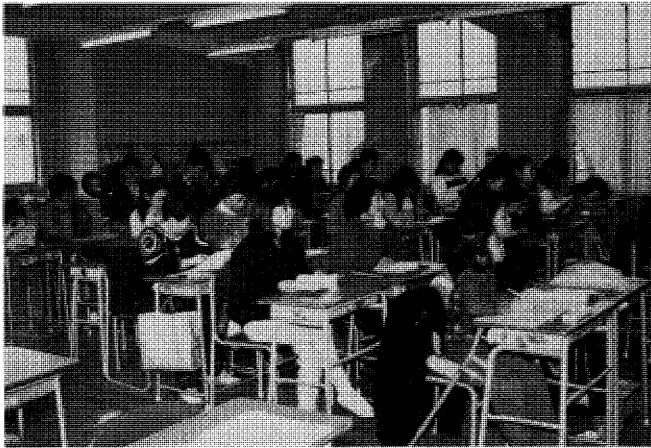
全日制や定時制の場合は、生徒のほとんど全員が十代後半の若者であるが、通信制はそうでもない。十五歳から七十代までの幅広い年齢層の生徒がいる。そこから、学校というものの、普通のイメージとは異なった面が出てくる。

まず、喫煙の問題がある。本校では、二十歳以上に限り、休憩時間に指定された場所で吸うのを許可している。

次に車両通学のことがある。本校も原則として車両通学は禁止している。しかし、通勤途次や体の不自由な方の通学のために車両が必要ということもある。そういう方には、事情を聞いて車両での通学を許可している。

さらに託児の制度というものがある。生徒の中には若い主婦の人もいる。この人達が日曜日

写真一 教室風景



のスクーリングに出席する最大の難点は子供の
ことである。育児には日曜日ということはない。
これが頭にあつて通信制の学校へ通うのを
ためらっている人もかなりいると想像される。
他県の通信制高校では、広報などの生徒募集
の記事に「託児もしています」とわざわざ書い
ている学校もあるほどである。

本校でも、日曜日は小学生以下の幼児を預
かつて、授業終了まで担当者がんばりを見
ている。子供同士が友達になつて会うのを楽し

にしているケースもある。多い日は十人以上の
子が来るときもある。兄弟で連れてくる母親も
いる。若い主婦のほとんどが、幼児を自宅に残
して学校へは出かけにくいと言う。もつともな
ことである。しかし、それゆえに学ぶ世界へ入
れないとしたら気の毒なことである。

一般の高校はどうしても若い生徒を対象にせ
ざるを得ない。せめて通信制だけでも、中・高
年齢層の社会人が、学習との接触を続けられる
ように対応していけたらと思つている。

⑧ 入学資格・入学試験

中学卒業の資格を有する者を対象としてい
る。しかし、中学を卒業していなくても、同等
以上の学力があると校長が認めた場合は有資格
者扱いとしている。戦争などで卒業証書を手に
することなく人生を過ごしてきた方に対して、
高校教育への何らかの道を考えたいと思つてい
る。

そういう資格者を対象にして、毎年二月末頃
に願書を配り、四月初旬に入学試験を行つてい
る。

一般的に考えられているような、筆記による
教科のテストではなく、面接をして可否の判断
資料としている。年配の方の中には英語が読め
ないから入試に落ちると考えている人もいるよ

うだが、そうした心配は徒勞である。私個人と
しては、熱意と継続可能性を高く評価したいと
思つている。

二——生徒それぞれの学ぶ姿

① 学習する喜び

年配の生徒の最大の喜びは、入学式であり、
最初の授業の始まりであるようだ。一時間目の
授業開始のチャイムを胸高鳴らせて聞き入る人
が多い。ほとんどの人がそうである。とても若
い人の喜びの比ではない。その喜びはとりも直
さず、学習に対する飢えがどのくらい強かつた
かということであろう。単なるレールの上の高
校教育ではなく、求め続けていた長い期間の渴
きの強さであろう。彼女達、彼等達の中には、
その瞬間に目を潤ませている者もいる。喜びと、
言いしれぬ感動でふるえる手を止められなかつ
たと言う人もいる。それはなんとすばらしい、
学習との出会いではないだろうか。

学問は与えられるものではなくて、求めて得
るものだとよく言われる。しかし、現実の高校
生の中に、そのように求めている者は少ない。
そういう中であつて、何年ぶり、何十年ぶりに、
飢えていた学問に出会える喜びを、瞳にきらき
らと輝やかせている生徒達の顔を見ると、私達

の心までも喜びで一杯になってしまいうものがある。

小学校へあがる前、あんなにみんな喜んでいたのでないだろうか。中には毎日ランドセルを背負って、入学式を指折り数えていた人も多いのではないだろうか。連日、三十分も早く登校したり、学校へ行くことを楽しみにしていたのではないだろうか。先生の顔をきらきら見つめて、じっと話しに聞き入っていたのではないだろうか。その笑顔を九年の間に失ってしまった人が多い。だが、通信制の年配者の顔は、その輝きを私達に思い出させてくれる。

二週間に一度の授業を待ちこがれ、一言半句も聞きもらすまいとする眼の輝きはクリスマスプレゼントの箱を開ける幼な子の瞳のようである。

②―夜間中学を卒業して

夜間中学を卒業して通信制で学ぶ人も何人かいる。

その一人Eさんは神奈川県に夜間中学があることを知らずに、東京の某夜間中学に通った。彼女は女学校卒業の頃が終戦の頃と重なり、卒業証書を手にしていなかった。その後のあわただしい世相の中で学校とは縁が切れ、結婚。五十代になってもう一度学習しようと思ひ立ち、

東京の中学まで通い始めた。彼女は通信制高校の学習も無事に終え、現在は専門学校へ通っている。

私はEさんのことを思い出すたびに、彼女の語ってくれた夜間中学のある人のことを考える。それはEさんが夜間中学に通い始めてまだ間もない頃のことだったそうだ。月一回のスクーリングに来る人はほとんどがEさんよりも年配の人が大部分で、たまたまその日隣り合わせた人は少しぐらい若いようだった。まだ名も知らぬ同級生が、スクーリングの時間に涙を流しているのに気付いた。次の時間にも同じように泣きながら授業を受けていた。Eさんは声をかけようかどうしようかと迷ったが、泣きながら必死にスクーリングを受けている彼女の姿勢は、Eさんの声を拒むようなものがあり、とうとう声をかけられなかった。なぜ泣いていたのか、その理由にEさんが気付いたのはそれからしばらくしてからのことであった。Eさんは二度と彼女の姿を見ることがなくなってから、初めてあの時の彼女の涙の理由がわかったという。

人はいろいろな事情を背負っている。通信制の学習に出合えた人でも、いつまた離れねばならぬことになるかも知れぬ。私の授業を、この夜間中学の生徒のような思いで受けている人が

いるかも知れぬと思うと、おのずから身の引きしまる思いである。

③―生まれて初めての教科書

Iさんは五十代の男性である。中学卒業後いろいろな職業を経て、現在自営業で活躍している。時々近所の子の勉強の世話もしてやり、レポートもていねいである。成績もとても良い。さぞや小・中学時代もまじめにやっつけて、成績も良かったのだろうと思っていたら、そうではなかったと言う本人の話を聞いてびっくりした。

彼の家は貧しくて教科書を買ってもらえなかったと言うのだ。先生に「この部分をやって来い」「この所を書いて来い」と宿題をよく出されたが、一度もやって行ったことがなかったという。教科書を持っていなかったのだから、それが彼の少年期であった。

通信制の高校へ入り、初めて自分の教科書を手にした時の彼の気持ちを想像してやってほしい。彼は私にその喜びを語ってくれた。目が潤んでいたように感じたのは、私の気のせいではないと思う。

④―看護婦さんも頑張っています

通信制の生徒の中には看護婦さんが何人もいます。中学を卒業して一生懸命に患者の世話をしても、「進看」という立場でしか患者に接することのできないのが、理由のひとつであるようだ。高卒の資格があれば「高看」になれる道もある。彼女達は勤務の合い間を縫っては登校し、レポートに取り組んでいる。

彼女達の中には、朝の七時に病院に入るように言われている人もいます。ある人は三交代勤務の中で、体の調子が合わせにくいと嘆く。その間に家事をし、レポートを書いている。夜勤あけで寝つかない人もいます。レポートどころではないという人もいます。急患のために、予定していたスクーリングに出席できなかったと寂しそうに語る人もいます。それでも皆頑張っている。順調にレポートの進んでいるTさんは「私は普通の勤務形態だから楽なのよ」と語ってくれたことがあった。それでも、主婦と仕事と高校生の三つをこなしているわけである。

定時制・通信制の生活体験発表会というものがある。各県で代表を選び、毎年冬に全国大会を開催している。その代表者の中に、例年看護婦さんが何人か入っている。白衣で病院を走り回っている彼女達の姿を想像しながら、私は、看護婦さんには頑張り屋さんが多いなと思わざるを得ない。

⑤ さまざまな主婦達

主婦の生徒の中でも、学習を始めた動機はさまざまである。

幼児を抱えて登校しているAさんに「もう少し子供が大きくなるまで待たないかが」と声をかけたら、「子供の記憶の残らぬ内に高校を卒業したい」と言っていた。中卒後まもなく高校へ進んだと子供に思わせたい何かを彼女は持っているのだろう。

小学生の子供を持っている人は、たいてい子供に励まされている。親子で机を並べて学習したり、こたつでいっしょに勉強している。「お母さんの勉強時間だから」とテレビを消してくれる子供もいれば、ラジオの通信教育講座の始まりを忙しい母に知らせる子もいる。

これが中・高校生の子になると、わからぬ時の子頼みになってくる。レポートの難しい設問を親子で考え合う。時にはバカにされながら教わっている。そうして断絶しがちな親子間を、うまく触れ合い活動の方へ転化している。そういう利益もまた通信制教育の良い点であろう。五十代の主婦になると、ほとんどが「子育ての次は自分育て」という気持ちのようである。育児から解放され、自分の時間にゆとりを持てるようになった主婦が、ふと気がつくと、家族の中で自分だけが置いてきばりになっているよ

うに感じるようだ。そうして自分の再教育に目を向け、通信制の学習を楽しそうに始めている。夫婦で学んでいる人もいます。どちらかと言うと奥さんの方が熱心のようなのだが、その内旦那の方がスクーリングを楽しみにするようになる。スクーリングの後の級友との一杯が彼の足を学校へ運ばせているようだ。Nさん夫婦は親子四人の学校のスケジュール表を部屋に飾っていた。こういうことも家族の明るさへつながっていくだろう。

自分の学習を家庭の中にうまく生かし、それをまた学習の方に生かしている人が、効果も上がり、卒業へ近づいていっているようである。

⑥ 学習の様子、得意・不得意科目

年配の人にとって大変なのは覚えることのものである。確かに記憶力の衰えは隠しようもない。どうしてこの単語が暗記できないのか。この公式をなぜ忘れてしまうのか。若い時は「平家物語」の冒頭をすらすらと暗記できたのに、今は短歌ひとつ頭の中に入れられないと嘆く人が多い。

テスト前に一生懸命に勉強したのですが、とうとう出て来なかったという声をよく聞かされる。中には台所に公式を書いて覚えたのにできなかったという人もいます。その自分に対する

もどかしさや怒り、口おしさは何とも言えない悔しさだと思う。その腹立たしさをぶつけるのも自分にしかないわけである。悲しい現実である。しかし、学んだからこそ、そういうことに気付き、脳の老化を少しでも食い止めているのではないだろうか。学んだことがテストの時間に思い出されなくとも、何かの折りに出てくるのではないだろうか。一度理解して頭の中に入れただけでも、その人の財産になったのではないだろうか。私はそう考えるが、いかがなものだろう。

年配の人の得意な教科がある。それは国語や社会である。もちろん個々によって差はあるが、総じてこういう科目は無難にこなしている。考えて見れば、現代社会の様子や地理を、知らず知らずの内に毎日学んで来たのではないだろうか。実社会の中でそういうものを学んで来た実績は大きいと思う。

国語も同様なことが言える。子供の頃しか本を読まなかったと言う人もいるが、若い人の倍以上を生きて来た内には、必死で読まねばならぬ文書（書類・通知文）もあったと思う。そして、年配の人の強みは、何と言っても文が書けるということである。作文は苦手だったと言う人もいる。最近では手紙ひとつ書いたこともないと言う人もいる。しかし、作文が下手だったと

言う四十代の人でも、若い人の中へ入るとかへのレベルの物を書く。自信をもって良い。次の俳句は主婦の作品である。

コスモスの優しき色に羊雲 SS

初もぎの無花果一つ子の口に TS

待ちもせぬ吾が誕生日萩の花 TS

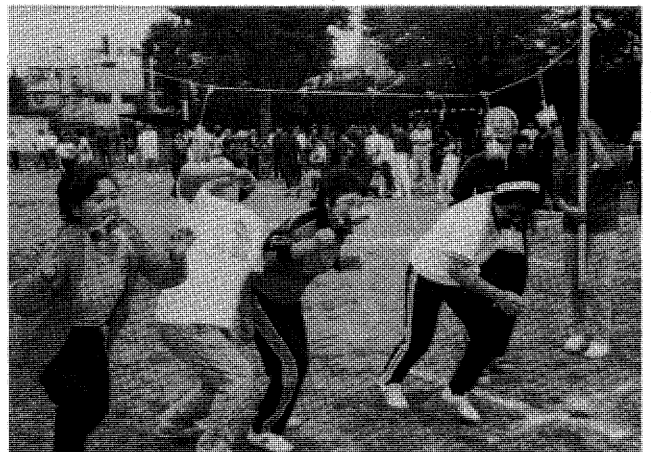
これらの作品を見ると年の功を感じずにはいられない。

その一方、英語・数学・理科・体育には、だいぶ手を焼いているようである。六十代ぐらいの人になると、初めて英語を学ぶという人も少なくない。文字通りABCからの学習である。辛いなことに、初歩レベルの質問にも気軽に応じている。案ずるほどのことはない。要はやっていこうという姿勢と、続けていく頑張りである。

体育ばかりは若い人のように体の動かないのが現実である。しかし体育祭などを中心になって積極的にやっているのは年配組である。最初の授業の翌日は体がパンパンに張って痛いという人もいる。しかし、社内運動会や地域の運動会ほどではない。卓球やバトミントン、バレーボールなどを考えていただければ良いであろう。

⑦ 無理せず学んでほしい

写真-2 体育祭風景



勤労者の学ぶ高校としては、定時制と通信制とがある。しかし、主婦やある程度の年齢者には、時間の融通のきく通信制の方が通い易いと思う。日曜日がつぶれてしまうのはおしい気もするだろうが、隔週であるので頑張つてほしい。Hさんは中学卒業後、かなりレベルの高い高校へ進学したが、落第しまもなく退学してしまった。社会にもまれた彼は、子供も小学生になったので、今度は通信制にチャレンジすることにした。無理せずにボチボチやっていこうと

言っている。私はそれが大切だと思う。無理をして、家庭の明るさや、職場の仕事をいい加減にして良いものではないはずだ。家庭にマイナスになるようなら、五年でも六年でもかけて学んでほしいと思う。

Kさんは田舎から中卒で出て来た。いわば金の卵の一人であった。少し都会の生活に慣れた昭和四十三年に本校へ入学してきた。しかし、四年間を無事に過ごすことはできなかった。結婚・育児の中で学業を中断せざるを得なかった。十余年のブランクの後に再び学習を始め、今年度卒業をめざしている。二十年目の卒業である。おそらくこの二十年の間、彼女の心の寄りどころに、心のささえに本校はなっていたのではないだろうか。無理せず家庭と仕事をやり続けて、学習をストップしておいた彼女の判断は賢明だったと、私は思っている。

昨春七十七歳で本校を卒業したYさんのことは新聞でも報道された。彼も卒業までに五年かかっている。入学した時点で五十八年間の勉強のブランクがあった。それに加えて高齢であった。途中で病気で入院したこともあった。それで四年間で卒業しようとしたら、どこかで中断せざるを得なくなっていたのではないだろうか。五年で卒業できたことも大変なことだったであろう。あわてず、自分のペースを大事にし

たからやり通せたのだと思う。

⑧ 若い生徒と共にいて

通信制にはいろいろな年齢層の人がいる。年齢でクラスを分けているわけでもないのに、親子以上の年の差はザラである。

四十代のMさんは子供が中学生以上であった。難しい年頃で、なかなか息子達の気持ちがつかめなかった。しかし、通信制で若い生徒といっしょに学んでいる内に、彼らの物の考え方やひとつひとつの行動が、息子達に通じるものであることに気付いた。良きにつけ悪きにつけ、自分の息子達の周囲にいる級友の世界というものが見えてきたわけである。多分これは母としてのMさんにとって、学業以上の収穫だったのではないだろうか。

自営業や、会社で何人かの部下を持っている人にも同様のことが言える。若い人をどう引っぱっていくか、どうやって教えていくかにとっても役立つと言っている。同級生としての目が本業に生きるのである。

年配の人がクラスにいるということは、若い人にとってもいろいろな面でプラスになっている。話に説得力がある。このおじさんの言うようにやれば安心という、指導性や信頼感がある。クラスの運営の面でも助かっている。私のクラ

スの五十代のIさんは、いじめられているK君を陰になり日向になりかばってくれた。お父さんのような役割りも背負ってくれている。

若い人が英語を教え、年配者が国語を教え合ったりしている。そういうクラスもある。いろいろな年齢層がうまくかみ合うと、普通の学校とは一味変わった生徒のつながりが生まれ、またすばらしい世界がつけられるようである。

⑨ 幅広い人生を

写真一 3 文化祭風景



三十代のTさんは調理師の資格をとって働き始めた。ゆくゆくは老人ホームのような所で、ボランティアとして、老人達の世話をしたいと思っていた。いろいろ美味しいものを作ってやりたいと言う。そのために栄養士の資格も手にとりたいと思ったが、高卒以上の学歴がないとれない。彼女は単に高卒の資格だけを求めて入学してきた。彼女にとって働きながらの学習は大変であり、他の人についていくのが精一杯であった。

学校へ通ってくる仲間の中にはレポートのできの良い人もいる。ほとんど質問する人もいる。家庭のことを話す友もできた。励まし合うのもひとつの楽しみになり、彼女の中にも学ぶことのおもしろさを感じるようなものが生まれて来た。

高校生を対象とした古典芸能の教室にも行ってみた。歌舞伎や能を見ている内に、更に友達の間が広がり、こういうものを学ぶ機会のなかったことを恨めしく思い、そういうクラブをつくらうかと考えている。今まであまり縁のなかった世界が彼女の手近かなものになりつつあるようだ。

年配の人の中には、Tさんのように、気付かず埋もれていた飢えがあるように感じる。それが十年、二十年の苦労の中に消えてしまったようだ。しかし通信制の学校で学んでいる内に、再び次々に燃え出すように感じる。年配者で挫折していく人が、若い人に比べて少ないのは、そういう炎が燃え出すからではないだろうか。私は彼等達の熱意に敬意を払わずにはいられない。

私はこういう人達を教えながら、自分が何を教えたなら良いのか自信を失っていく。教育が人格の育成を目標におくならば、私達の方に学ぶことが多いような気がする。生きてきた人生の重みが、かえって私達にいろいろなことを教えてくれるからである。

⑩ 進学、巣立ち

この春も多くの生徒が通信制を巣立って行く。その中には学習に弾みがつき、横浜市立大学や国学院大学に合格した中年の生徒もいる。彼女達も始めの内は数学や英語に悩まされた。しかし、学歴社会の中で味わされたつらい思い出をバネに、必死で頑張ってきた。返送され

てくるレポートの赤マルや、友の励ましが彼女達をどれほど力づけたことか。そして、遅まきながら「花の女子大生」へ羽ばたこうとしている。

子育ての終ったSさんは好きな歴史を学び後半生で史学の研究に生きがいを見つけようとしている。大学に合格した折、レポーターに仕事にと明け暮れた苦しい四年間は、この発表の日、一日でふっとんだ」と述べている。彼女は郷土史家へ向かって新たな前進を始めようとしている。

もちろん大学へ進むことが本校の学習目標ではない。今は「人生八十年」の時代である。四十歳前後で自分を再教育し、もう一度自分を見つめ直し、育てるのも意義あることではないだろうか。私は通信制で学んでいる彼等の背中を見ながら、人生をもう一度生きようとしているように思えてならない。学ぶことが彼等にとってどのような糧になるのかはわからないが、生徒それぞれの人生の中で、必ずや役立っているのではないだろうか。

△県立横浜平沼高等学校教諭▽